

電話会議開催日：2023年11月8日

2024年3月期（2023年度）第2四半期連結決算 電話会議 内容説明スクリプト

I. 全般概況

説明を始めるにあたり、投資家の皆様よりいただいたご意見・ご要望をもとに、当社の業績をご理解いただく上で前提となる金属価格・為替レートの傾向をイメージできるグラフを参考情報として決算補足説明資料の16-17ページに追加しました。これまでと資料の構成が変わっておりますので、ご注意ください。

それでは本日発表いたしました当社2024年3月期第2四半期決算の概要についてご説明します。なお、事業環境等は決算短信に記載しておりますので、のちほどご参照ください。

1. 2024年3月期 第2四半期連結決算 業績概要

当年度第2四半期連結決算の概況をご説明いたします。決算補足説明資料の2ページをご覧ください。

ページ上段の表の左から、①が当期第2四半期累計実績、②が前年同期実績を記載しています。その右側の「増減①-②」をご覧ください。2023年度第2四半期連結累計期間の金属価格および為替レートは、前年同期間と比較し、金の価格は上昇しましたが、銅、ニッケルの価格は下落し、為替は円安になりました。

連結売上高は、車載用電池材料の増販などにより、前年同期間に比べ65億円増加し、7,171億円となりました。

連結税引前利益は、銅およびニッケル価格の下落や、前年同期間の急速な円安進行に伴い生じた為替差益などの一時的な損益好転要因が当期間は縮小したことなどから、前年同期間に比べ1,153億円減少し、538億円となりました。

2. 2024年3月期（2023年度） 連結業績予想

続いて3ページをご覧ください。今回、通期の業績予想の見直しを発表いたしました。上段の表のうち③、⑤、および右端の「③-⑤」をご覧ください。

③の11月業績予想の前提となる金属価格および為替レートは、⑤の8月予想に対し、銅、ニッケルの価格は下落するものの、金の価格は上昇し、為替は円安傾向になると予想しています。

その結果、8月予想に対して、11月予想は、右端の「③-⑤」に記載のとおり、連結売上高は270億円増収の1兆4,300億円、連結税引前利益は20億円増益の860億円を予想しています。

3. 2024年3月期（2023年度） 実力損益

3ページの下に掲載したグラフの右端に「実力損益」を載せています。これは、2023年度通期業績予想（11月）から、主に金属価格や為替といった相場の変動局面において発生する一時的な要因と、その他の特殊要因を除いたもので、言い換えると、現在想定している2023年度の事業環境のもと、3ページの上の表の③に記載した金属価格や為替が一年間継続し、さらに特殊な損益変動要因が無いことを前提した場合の税引前損益です。

11月の業績予想における実力損益は、「1,200～1,100億円」となります。「1,400～1,300億円」としていた5月予想時点の実力損益から200億円程度の方修正となりますが、その主な要因は、前提となる金属価格が下落していることや海外銅鉱山を中心にコスト単価が上昇したためです。

例えば、単純な比較は難しいですが、11月予想と5月予想の比較である【比較3】(3ページ中段)に記載のとおり、価格条件差で-184億円悪化、為替差で+121億円好転、コスト単価差で-125億円悪化などが、実力損益が200億円程度低下する主な内訳となります。

金属価格や為替は当社でコントロールできない部分ですが、コスト単価差の-125億円にも、海外銅鉱山をはじめとする販売数量減少に伴う単位コストの上昇や、在庫の関係で実勢価格よりも高いエネルギーコストが実現している(つまり、在庫の関係でまだ価格が下がりきっていない)ものが含まれており、当社の「モノづくり力」が大きく低下したというわけでは、必ずしもないと考えております。今後も引き続き、安定操業の維持、生産効率の向上、固定費の削減などに努め、実力損益の向上に取り組んで参ります。

4. トピックス（生産動向）

生産・販売量について、前年度対比と5月に発表した年度予想との差を説明します。決算補足説明資料の12～13ページをご覧ください。

海外銅鉱山

《モレンシー》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
 - ・2023年度第2四半期連結累計期間の生産量は、採掘量の減少などにより前年同期間を下回りました。
- ・5月予想比較（増減③-④）：
 - ・前年同期比較と同様の理由で減産と予想しています。

《セロ・ベルデ》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
 - ・2023年度第2四半期連結累計期間の生産量は、処理量の増加と給鉱品位の上昇などにより前年同期間を上回りました。
- ・5月予想比較（増減③-④）：
 - ・5月予想に対しても若干の減産を見込んでいますが、ほぼ計画通りと予想しています。

《カンデラリア、オホスデルサラダ》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
2023 年度第 2 四半期連結累計期間の生産量は、オホスデルサラダ鉱山付近に発生した陥没穴の影響等により、前年同期間を下回りました。
- ・5 月予想比較（増減③-④）：
ほぼ計画通りと予想しています。

国内製錬

《電気銅》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
 - ・2023 年度第 2 四半期連結累計期間の生産量は、定期炉修前には操業難易度が上がることから、中間製品の積立不足により前年同期を下回りました。
- ・5 月予想比較（増減③-④）：
 - ・上期の影響で減産となりますが、下期はほぼ 5 月計画通りと予想しています。

《ニッケル》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
 - ・2023 年度第 2 四半期連結累計期間の生産量は、昨年度を上回りました。
- ・5 月予想比較（増減③-④）：
 - ・上期の操業トラブル（復旧済）の影響はありますが、ほぼ 5 月計画通りと予想しています。
 - ・フェロニッケルは引き続き厳しい事業環境が続いており、生産の調整を行っています。

海外製錬

《CBNC / THPAL》

- ・前年同期比較（増減①-②）：
 - ・THPAL は概ね計画通りに操業しました。CBNC は設備トラブル（復旧済）の影響があり、前年度と同水準となりました。
- ・5 月予想比較（増減③-④）：
 - ・THAPL は当初計画を下回るものの概ね計画通りと予想しています。
 - ・CBNC は設備トラブルなどにより、上期、下期ともに 5 月計画を下回ると予想しています。

5. 配当

配当についてご説明いたします。

第 2 四半期連結累計期間の業績が確定したこと、並びに通期連結業績予想を修正したことにより、当社の 2021 年中期経営計画（対象期間：2022～2024 年度）における利益配分に関する方針「剰余金の配当は連結配当性向原則 35%以上とする」に基づき、第 2 四半期末の配当額並びに期末の配当予想の見直しを行いました。

その結果、2023 年度の 1 株当たり年間配当金の予想額は、5 月の決算予想発表時から 17 円増配の 71 円となりました。中間配当となる第 2 四半期末配当は、その半分とし、前回発表予想から 1 株当たり 8 円増配の 35 円といたします。また、期末配当の予想については前回発表予想から 1 株当たり 9 円増配の 36 円といたします。

【2023 年 3 月期（2022 年度）連結決算 電話会議 内容説明スクリプトから抜粋】

当社が事業を行っている非鉄金属（銅やニッケル等）の需要は、中長期的には堅調に伸びていくことが見込まれていますが、非鉄金属のアセットは採掘すれば減耗していくため、常に入れ替えを行っていく必要があります。また、LME に代表される取引市場で価格が決まるため、当社損益は経済動向を含めたマーケット環境に大きく左右されるという特性をもっています。

加えて、当社を取り巻く事業環境も年々厳しさを増しています。限られた優良資源の獲得競争は激化しており、新たな資源の開発においても、高地化や深部化等に加え、コスト上昇など、ますます難易度が高まっています。そのため、投資判断は時間をかけて様々な角度から精査し慎重に行いますが、ひとたび決定すれば、すぐに 1,000 億円単位の支出が必要となります。また、成果の刈り取りには数年単位の時間がかかるため、これらに耐えられる財務基盤がなければ事業を継続できませんし、パートナー候補としても声はかかりません。

このような事業特性、事業環境においては、成長戦略遂行のため健全な財務基盤の維持が必要であることから、株主還元方針は「連結配当性向 原則 35%以上」を維持してまいります。

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

ここからは、決算補足説明資料について、ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 2 ページ 決算実績比較

今回は、5つの断面で分析をしています。

1) 2023 年度 2Q 累計決算 vs 2022 年度 2Q 累計決算

2 ページ目上段の表の下、脚注【比較 1 : 2023 年度 2Q 累計決算 vs 2022 年度 2Q 累計決算 ① - ②】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益-1,153 億円減益の要因のうち、相場要因の悪化-456 億円とその他の為替差損益-277 億円以外の主な項目をご説明いたします。なお、なお、在庫評価の内訳は 4 ページに、その他の為替差損益の内訳は 7 ページ下段に記載しております。コスト単価差については、2022 年度に大きな影響を与えたエネルギー価格等の影響がまだ残っていること、また、海外銅鉱山での一時的な設備のメンテナンスコスト増などで-78 億円の悪化となりました。

材料セグメントの損益は、電池材料の需要は堅調に推移しましたが、前年度損益を大きく押し上げた受払差が剥落したこと、また、電子部品向け部材の需要減等により-149 億円の悪化となりました。副産品-66 億円の悪化は、昨年度高騰していた硫酸価格が当年度は下落している影響などによるものです。Sierra Gorda 関連費用は、8 月予想では「リスク要因」として計上していたもので、チリで新鉱業ロイヤリティ法案が公布されたことにより、Sierra Gorda 銅鉱山権益譲渡契約に含まれていた譲渡価格調整が発生したことによるものです。その他の他-57 億円の悪化には、連結決算における期ズレ調整やグループ間取引の消去等、様々な要因が含まれています。

2) 2023 年度 2Q 累計決算 vs 予想 (8 月)

表の脚注【比較 2 : 2023 年度 2Q 累計決算 vs 予想 (8 月) ① - ③】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益+48 億円好転の要因のうち、相場要因+43 億円の好転とその他の為替差損益-55 億円の悪化以外の主な項目について説明します。材料事業の好転+38 億円は電池材料の受払差と機能性材料の対予想好転によるものです。その他の他+59 億円は 8 月予想時には「リスク要因」として「その他」で計上していた Sierra Gorda 関連費用-49 億円と相殺されるものです。

2. 3 ページ 業績予想比較

3) 2023 年度予想 (11 月) vs 2023 年度予想 (5 月)

2023 年度の年間業績予想の比較について説明します。直近の業績予想は 8 月に発表しましたが、8 月年度予想は、発表時の説明のとおり、第 1 四半期実績と、積み上げ式で作成した第 2 四半期の予想からなる上期予想をスタート地点とし、下期の生産・販売量は主要鉱山・製錬所・電池材料の 5 月公表時の計画を使用し、業績に大きく影響を及ぼす市況影響については「感応度」を利用して算出いたしました。そのため、11 月予想と同じベースで比較可能な 5 月予想との増減を説明します。

3 ページ目上段の表③が今回見直しました 11 月予想、その右④が 5 月予想です。その右の③-④をご覧ください。

③の11月予想の前提となる金属価格および為替レートは、④の5月予想に対し、銅、ニッケルの価格は下落するものの、金の価格は上昇し、為替は円安水準になると予想しています。

その結果、④の5月予想に対して、③の11月予想では、連結売上高は640億円増収の1兆4,300億円、連結税引前利益は90億円増益の860億円を予想しています。

3ページ目上段の表のすぐ下、脚注【比較3：対予想比較：2023年度予想（11月）vs 2023年度予想（5月）③-④】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益+90億円増益の要因のうち、相場要因+181億円の好転とその他の為替差損益-51億円の悪化以外の主な項目をご説明します。なお、在庫評価の内訳は6ページに、その他の為替差損益の内訳は7ページ下段に記載しておりますので、後ほどご参照ください。

まず「相場要因」と「材料」に含まれていない持分法適用会社とその他のセグメントの+300億円の好転と受取利息減（支払利息相殺後）-175億円の悪化について説明します。+300億円の好転の中に、当社が試算したQB2プロジェクトの好転約270億円が含まれています。具体的には、関係者による確認・判断が進んだ結果、5月の当社試算において、費用計上されると考えていたランプアップ費用や当社グループに対する支払利息等が資産計上されたことなどによるものです。一方で、その中に含まれていた当社の受取利息の一部も当期に計上できない見通しです。詳細は申し上げられませんが、受取利息（支払利息相殺後）-175億円の要因のほとんどがこの影響とお考えください。

次に材料のセグメント損益は5月予想と同水準と予想しています。上期については、機能性材料は顧客の在庫調整が続いているものの、一時的な需要増があったこと、また電池材料は受払差が5月予想に対し好転したことでセグメント損益は28億円を計上しました。しかし、下期においては、金属価格等下落にともなう電池材料の受払差の拡大や、機能性材料において在庫調整が想定よりも長引くと予想していることから、下期は大幅な減益を予想しています。

コスト単価差-125億円の悪化については、発生ベースのエネルギー価格や主要資材の単価等は概ね5月予想を下回る水準となりますが、銅系、とくに海外銅鉱山での一時的なメンテナンスコスト等の増加などにより大きく悪化すると予想しています。

その他の他+24億円の好転については、販売費用の対5月予想減や受取配当金の対5月予想増等によるものです。

4) 下期予想（11月）vs 2Q累計決算

表の脚注【比較4：下期予想（11月）vs 2Q累計決算②-①】の税引前利益増減分析をご覧ください。

上期実績と下期予想の比較です。税引前利益-216億円悪化の要因のうち、大きな割合を占める相場要因-163億円は、上段の表、右から3列目の増減②-①に記載のとおり、銅価格は同水準での推移と予想していますが、ニッケル価格、金価格は下落し、為替は円高での推移を予想しているためです。数量差-37億円は主に菱刈鉱山によるもので、年間金販売量4.0tは変わりませんが、下期に予定されている東予工場の定期炉修を考慮し、上期に多く販売したことによるものです。コスト単価差の悪化は、海外銅鉱山でのコスト単価差の悪化や、菱刈鉱山の減販などによるものです。それ以外の増減要因は、概ね比較3で説明した内容の通りです。

5) 2023 年度予想 (11 月) vs 2023 年度予想 (8 月)

表の脚注【比較 5 : 2023 年度予想 (11 月) vs 2023 年度予想 (8 月) ③-⑤】の税引前利益増減分析について、11 月予想と 8 月予想の差異は、概ね比較 3、4 で説明した内容のとおりです。

3. 4 ページ セグメント別決算実績比較 (売上総利益増減)

4 ページ 決算実績比較 2023 年度 2Q 累計決算 vs 2022 年度 2Q 累計決算をご覧ください。

資源セグメントの売上総利益は 344 億円と-81 億円の減益となりました。ページ中央の増減説明に記載のとおり、菱刈鉱山、海外銅鉱山ともに円安による為替差の好転はあったものの、菱刈鉱山は年間の販売量を 2022 年度の 4.4 トン/年から 2023 年度は 4.0 トン/年に見直したことにより数量差、コスト単価差が悪化しました。

海外銅鉱山では、モレンシー銅鉱山の減販による数量差、銅価格下落による価格差、エネルギーや操業資材の価格上昇等の影響が残っていることに加え、設備の一時的なメンテナンスコスト増加などによるコスト単価差が悪化要因となっています。

製錬セグメントの売上総利益は 428 億円と-582 億円の減益となりました。下段の増減説明のとおり、銅系で-254 億円の悪化、ニッケル系で-234 億円の悪化です。その大きな要因は、一番下の表「在庫評価損益発生額」に記載のとおり、2022 年度上期は銅系・ニッケル系ともに価格や為替の変動に伴い発生した在庫評価益が利益を押し上げましたが、2023 年度上期は、銅系・ニッケル系ともに価格が下落局面であったことから、その差が大きく出ています。また、ニッケル系では、価格下落により、条件差も大きく悪化しています。

なお、ニッケル系は、2022 年度上期においてフィリピンでの悪天候等の影響を受けましたが、2023 度は CBNC での設備トラブル等による減産はあるものの、概ね計画通りに操業を続けています。

4. 5 ページ セグメント別決算実績比較 (材料事業の製品群別売上高)

5 ページ上段、材料事業の製品群別売上高です。電池材料については、堅調な需要が続いており、+275 億円増収の 1,214 億円となりました。一方、機能性材料等については、電子部品向けの需要減の影響が大きく、また 2022 年度に譲渡した子会社の影響等もあり、-137 億円減収の 521 億円となりました。

5. 5 ページ セグメント別決算実績比較 (持分法投資損益)

5 ページ中央、2023 年度 2Q の持分法投資損益です。セロ・ベルデ、カンデラリアともに、順調に生産を継続しましたが、銅価格の下落や一時的なメンテナンスコストの増加等によるコスト単価差の悪化の影響を受け、-35 億円減益となる 162 億円となりました。

6. 6 ページ セグメント別業績予想比較 2023 年度年間予想 (11 月) vs (5 月)

6 ページをご覧ください。2023 年度通期の 11 月予想と 5 月予想のセグメント別比較です。なお、業績予想の数値は 10 億円単位の丸め数字で記載しています。

資源セグメントの売上総利益は 580 億円と-20 億円の減益と予想しています。ページ中央の増減説明に記載のとおり、菱刈鉱山では、5 月予想よりも金価格の上昇と為替が円安水準で推移することで、+48 億円の好転を予想しています。

一方、海外銅鉱山では、発生ベースのエネルギー価格は低下傾向にあることは確認しておりますが、生産不調による販売数量の減に加え、一時的なメンテナンスコストの増加等によるコスト単価差の悪化を予想しております。その他-13 億円は、セグメント間の期ズレ調整によるものです。

製錬セグメントの売上総利益は 640 億円と+70 億円の増益と予想しています。増減説明に記載のとおり、銅系で+234 億円の好転である一方、ニッケル系は-169 億円の悪化予想です。銅系では、5 月予想よりも為替を円安で想定したことによる在庫評価益の好転を予想しています。ニッケル系では、5 月予想よりも価格が下落すると予想したことにより条件差が悪化し、減益を予想しています。なお、ニッケル系のコスト単価差悪化は、CBNC の減販によるもので、エネルギー価格等の下落を享受した THPAL のコスト単価差は 5 月予想よりも好転しています。その他は、記載のとおり、グループ会社間のセグメント内消去等です。

7. 7 ページ セグメント別業績予想比較 2023 年度年間予想 (11 月) vs (5 月) **(材料事業の製品群別売上高)**

7 ページ上段、材料事業の製品群別売上高について、材料事業全体の売上高は 3,410 億円と予想しています。電池材料は引き続き需要は堅調ですが、機能性材料は 5 月予想よりも販売環境が厳しくなると予想しています。

8. 7 ページ セグメント別業績予想比較 2023 年度年間予想 (11 月) vs (5 月) **(持分法投資損益)**

7 ページ中央の持分法投資損益については、5 億円刻みの丸め数字で記載しています。持分法投資損益全体としては、365 億円と+220 億円の増益と予想しています。

ゼロ・ベルデ、カンデラリアともに価格の下落やコスト単価差の悪化を予想しています。

その他の+270 億円の好転には、先ほどの説明のとおり、QB2 プロジェクトで費用計上されると考えていたランプアップ費用等が一部資産化された影響等が多く含まれています。

なお、19 ページには、愛媛県で建設中の電池材料の新工場と、カナダのオンタリオ州で建設中のコテ金開発プロジェクトの近景を掲載しております。いずれも工事の進捗を確認いただけると思いますので、後ほどご覧ください。

以上